

五 小 の 風 景

No. 10

五日市小学校長 國政 直文

若いときは苦勞を

新年、明けましておめでとうございます。新年のあいさつが遅くなりましたが、本年も本校教育へのご理解ご支援の程、よろしくお願ひいたします。

後期後半がスタートして1週間となりましたが、子ども達はそれぞれに今年の目標を立て、その目標に向けて取組を始めています。せっかく立てた目標ですから、時々確認しながら、是非とも目標を達成し、今の自分よりもレベルアップしてほしいと願っています。

最近読んだ本に、「宮大工の人育て ～菊池恭二 著～」という本があります。その中で「木も人も、若いときは苦勞したほうがいい」という部分がありました。以下本文をそのまま紹介します。

みしょう
実生という言葉をご存知でしょうか。木から落ちた実(穂)が発芽する事で、簡単に言えば、自然に育つ天然の木の事です。たとえば、ケヤキなどの広葉樹は植林して人が育てる木ではありません。広葉樹は杉やヒノキなどの針葉樹と違って枝を大きく張るため、植林しようと思ったら広大な場所が必要になるからです。このため、ケヤキなどは実生で育つわけですが、実が落ちたからといって、すぐに芽吹くわけではありません。まわりの木が、風や雪や雷などで倒れるとか、人の手が入って切られるとかして、地表まで十分に日の光が差し込むようになって初めて、それまでに落ちた実がいつせいに芽吹くわけです。それからは芽吹いたほかの仲間との成長競争です。後れをとれば、日陰に追いやられますから誰よりも先に背を伸ばそうとします。(中略)それを考えたら、人の手で育てられた人工林は、温室育ちのようなものです。たとえば杉であれば、まず種を取ってきて苗圃という苗畑を作って、5、6年、苗木を育てます。それを買ってきて、あらかじめ杉を植えるために雑木などをきれいに切っておいた山に一本一本、穴を掘って整然と植林していくわけです。競争も何もありません。日当たりもいい。日陰にならないように下草まで刈ってもらいます。なのに枯れる苗木が少なくない。苗圃で人に管理され、大事に育てられた苗木を土壌の違うよその土地へ根を動かして持ってきて、ポツと植えても土になじめないものもあるわけです。

一言で言えば、植林の木は実生に比べてヤワです。人も木もその性質を形作るのは環境とか育ち方であって、鍛えられていないのはどうしたって打たれ弱い。甘やかすとろくなことはないのです。人も木も若いときは苦勞したほうがいい。つくづくそう思います。ですから建築用材で使うなら、それはもう文句なしに実生のほうがいい。

以上のような文章です。私もつくづくそうだなと思います。とかく、私達大人は、子どもにできるだけ失敗させたくないという思いから、先回りしていろいろと準備をしたり、時間がかからないようにとレールを敷いてしまったり、子どもが判断する前にこちらが決定したりと子どもの伸びようとする力を摘み取っているのではないのでしょうか。

子どもは、失敗するから、同じ失敗をくりかえさないためにどうしたらいいのかと本気で考えるでしょうし、時間をかけて考えるからこそ自分の本当に力になるのでしょうし、自ら判断するからこそ、その判断が正しかったのか間違っていたのかを反省することもできるのでしょう。そして、その反省が生きるのでしょう。

時間をかけて自分で考えることはしんどいことです。また、失敗することは辛いことです。でも、先ほどの木の場合と同様に、そういった厳しい環境の中で、しっかりと子どもを育てていくことが、子どもの幸せに繋がっていくのではないかと考えます。

18世紀の有名な哲学者、政治思想家、教育思想家、作家であったジャン＝ジャック・ルソーは、「子どもを不幸にする一番確実な方法は、いつでもなんでも手に入れられるようにしてやることだ」と言っています。大人がすべて段取りしてやるのではなく、自分で考え、決断し、勝ち取る(解決する)という経験を多くさせたいものです。

「知ることの難きに非ず、行うことこれ難し。」(右の写真)これは、玄関掲示板に、本校の森下特別支援学級指導員に作成していただいたものです。この言葉のとおり、したほうがいいのかは知識としてはだれでも簡単に分かるのですが、実行するという事は本当に難しいことです。だからこそ、本気で取り組んでいく必要があるように思います。子ども達のために。

